

# 会 報

109

— も く じ —  
あいさつ  
P T A 指導者地区研修会  
平成 17 年度行事予定  
高校生善行表彰

静岡県公立高等学校 P T A 連絡協議会

ホームページ : <http://www.hs-pta-shizuoka.net/>



## 年 頭 に あ た っ て

静岡県公立高等学校 P T A 連絡協議会

会長 豊岡 武士

新年あけましておめでとうございませう。

会員の皆様には、希望に満ちた初春をお健やかに迎えのこととお慶び申し上げます。また、高校生諸君も決意新たに平成十七年を迎えたことと拝察しております。

日頃、会員の皆様にはそれぞれの高校の P T A 活動にご努力されるところにも県高 P 連の事業にもご理解とご協力をいただき、この機会に改めて敬意と感謝を申し上げます。

私も、昨年の総会で歴史と伝統のある県高 P 連会長のバトンを受け継ぎ、早いもので二年目を迎えようとしておりますが、国際化・情報化・少子高齢化の急速な進展など内外の社会経済情勢の大きな変化が続くなか、その責任の重さを感じているところでありませう。

さて、昨年は、相次ぐ台風の襲来、さらに中越地震と災害が続き、これらの地域では高校生をはじめ教育関係にも大きな影響や被害があったものと思えます。このため、全国高 P 連による「新潟中越地震募金活動」に P T A の

ご協力をいただき、義援金を送らせていただきました。被災された方々が一日も早く普通の生活に戻れるよう、皆様とともに祈りしたいと存じます。

一方、大企業を除いては必ずしも状況が改善されず、回復が望まれる景況、三位一体改革の地方自治や教育行政に及ぼす影響、悪化を続ける治安状況など、今年に引き継がれた課題も数多くあると思えます。

高校生を取り巻く状況についても「卒業後の就職先の確保」をはじめ「情報機器の発達に伴う様々な問題」、「若者の薬物乱用や性感染症の広がり」など心配の種は尽きません。もとより、道や駅で出会う殆どの高校生は、昔も今も変わらず楽しんでおり、将来への多少の不安や悩みを抱えているとは思いつつも、真剣に学び、部活動でも頑張っているように見受けられます。

こうした高校生が安心して学び活動ができるよう、学校完全週五日制が始まって三年、県高 P 連では西原前会長のリーダーシップのもと、P T A 等の主催による土曜日の講習や学校管理下での部活動中の災害について、「安

全振興会」の給付事業の対象にすること、全高 P 連賠償責任補償制度への加入、学校敷地内の禁煙運動、県高 P 連ホームページの立ち上げと情報公開などに取り組んでまいりました。

高校 P T A の活動は、高校生の学習環境や生活環境の整備と健全育成に中心があると思えます。これからも、P T A として本県の高校生が「学ぶ力や確かな学力」を身につけ、また、将来の「職業観」を培っていきけるようサポートし、さらに、心身ともに「健やかに成長」できるよう様々な心配の種をどのようにしてなくして行ったら良いのか？今年も皆様と共に考え、行動して行く県高 P 連でありたいと思えます。

なお、本年は、本県高 P 連が東海四県高 P 連の大会を受け持つことになっております。高校生の年頃は感受性の強い時期であり、メディアの影響も大きいものがあると思ひ、P T A の心配の種の一つでも減らすことができるよう、「高校生とメディアの影響」をテーマに、六月十六日に静岡市で開催する準備を進めています。会員の皆様のご理解とご協力を県高 P 連の事業の推進と併せてお願いいたしますと共に、本年もそれぞれの単位 P T A の一層のご活躍と本県高校生の健やかで確かな成長を心から祈念いたしまして、年頭のご挨拶といたします。

平成十六年度

## P T A 指導者研修会 県下十一会場

P T A 指導者研修会（県教委主催）は、「子どもの健やかな心身を育むために『子育ては親育ち』」をテーマに公立幼・小中・高校合同で約二百三十人が参加し、六月二十六日静岡市のあざれあ（県男女共同参画センター）で開催され、P T A 活動の充実を図るために、家庭・学校・地域社会の連携や家庭教育充実の支援の在り方などについて研究協議を行った。県立高校関係者は県下各地区から二人、二十人が参加した。

全体会では「少年問題の裏側～家族病理を映す鏡～」と題して東海女子大学人間関係学部心理学教授長谷川博一先生が講演を行った。

高 P 分科会では、「情報社会と青少年」について県総合教育センター企画振興課指導主事久米昭洋氏を招いて意見交換を行った。また、この研修会を発展させて各地区で高等学校 P T A 地区指導者研修会が次のとおり十一会場で開催された。

月 日	研修会地区	会 場	参加者数
7. 6	賀 茂 地 区	下田市民文化会館	210 人
7. 7	三島・田方地区	熱 海 高 校	150 人
7. 1	沼津・駿東地区	沼津市立図書館	213 人
9.24	富士・富士宮地区	富士ロゼシアター	218 人
9.17	清水・庵原地区	エリザベート	205 人
10.29	静 岡 地 区	ルヴェールたちばな	194 人
7. 2	志太・榛原地区	藤枝市生涯学習センター	190 人
7. 1	小笠・周智地区	県原子力広報研修センター	144 人
7. 3	磐 田 地 区	ワークピア磐田	186 人
6.25	浜松・西遠地区	呉 竹 荘	125 人
6. 5	盲・聾・養 P 連	ルヴェールたちばな	100 人

盲聾  
養護学校  
於 ルヴェールたちばな  
参加者 一 名  
六月五日（土）

### 講演会

「支え合う生活」

講師 大泉作業所所長

大森一二三

開所当初、「支え合う心」心を大事にすることを定め、通所者一人一人と向き合ってきました。大泉作業所は B 型小規模授産所で、定員二十名、指導員四名です。補助金をいただいてそれで運営しています。今年六年目になります。現在十八名が通所しており、知的障害者八名、身体障害者十名（車椅子四名）です。設備として作業棟と加工棟の二棟があります。二か所で作業をするのは指導員の配置が難しく、また障害の幅が広いので対応が大変です。個に対するサービスが欠落していくように思います。そこで、市の担当者と話し合い、A 型を二つにしてみたいと交渉したがうまくいきません。A 型を二つにすれば補助金が倍になり、よりよいサービス（個人と個人のお付き合い、個人と個人のふれあい、人と人とのぬくもりが伝わり合う）ができると考えている。事業ですが下請けが九十九%、自主製品が 1%、それを何とか自主製品を四%にしたいと計画を進めています。新しい物として古紙から作る植木鉢やバック・エプロン

等考えています。



大森一二三先生の講演

まる五年経ち、一人一人の変化が見られました。素晴らしい形でお付き合いをしてくれるようになってきました。目の輝き、指先の力がついてきている。笑い合える相手がいる、仕事をし合える相手がいる、集団があるということは一人一人に生かしていくために大事なことです。それを共用していく作業所でありたいと思っています。また、次のようなことを小規模授産所の究極と考え努力していきたいと思っています。きれいな事は通らない。泥んこになって働くという精神 一人一人の人格を大事にする 人の和を大事にする 集団に生きる 同行二人、仲間がいる。

## 二 研究発表

## 「本校のP A活動」

発表一 東部地区代表 富士養護学校

P A会長 野田 春美

本校は、富士市の北部に位置し、校舎の裏手には、霊峰富士を仰ぎ、自然環境に恵まれた所にあります。学区は、富士市、富士宮市、芝川町を中心としています。

平成二年に、小学部・中学部の知的障害児と肢体不自由児の児童生徒が学ぶ養護学校として開校し、続いて平成三年度に高等部、平成八年度には高等部重複障害学級、平成十二年度から高等部訪問教育が開設されました。



P T A 活動の発表

全生徒数は、現在二百八十八名で、小学部百八名、中学部九十五名、訪問教育十二名です。

活動としては、長期休業中に家庭内

で過ごしがちな子供に対して、親子で有意義な時間を過ごすことを目的として、「遊びの会」や、「ビデオ上映会」を行っています。

「遊びの会」では、四十六名もの高校生ボランティアが参加してくれて、教員ボランティアや参加者と共に、楽しい一時を過ごし、暖かい心で触れ合い、障害のあるなしにかかわらず、共に活動できたことは大変有意義でした。

平成十四年度から始めた「ビデオ上映会」も、今年で三年目となり、昨年度は参加者が百八十六名でした。ボランティアセンターに登録されている方々にも協力を依頼し、大きなスクリーンで見ることができたため、映画館の雰囲気を楽しむことができました。暗い所が苦手、大きな音が嫌いなと、長い間座つていられなかった子供たちも、経験することにより、少しずつ新しい環境に慣れていく良い機会となりました。

その他に、知的・身体的にも重い障害を併せ持つ子供の親の会「はなみずき」が発足し、自分たちが一番分かる福祉サービスの担い手にと考え、今年四月に、社会福祉法人「でらーと」をオープンする運びとなりました。これからは、P A組織として、育成会やそれぞれの会への協力を図り、通所施設の立ち上げなどに積極的に関わっていきたく考えています。

## 発表二 中部地区代表 中央養護学校

P A会長 桐林 京子

本校は、昭和二十八年に、肢体不自由施設「静岡療養園」に入所中の子供のための小・中学部特殊学級として設立されました。昭和三十三年に、県立養護学校として独立し、昭和三十九年には、分校として置かれていた天竜分校が天竜養護学校として独立、浜松市に西部分校設置、昭和四十一年には菰山町に東部分校設置、昭和四十五年高等部設置、昭和四十九年静岡市曲金から現在の地に移転し、校名が「静岡県立中央養護学校」に変更し、東部・西部分校が独立という、経緯をたどりました。

P A会員数は現在、三百二名です。昨年度のP A活動では、全国心身障害児福祉財団から委託を受けて、地域連人休日ふれあい交流事業」を行いました。

土・日曜日や長期休業日に、地域に在住している障害のある子供たちと、障害のない子供たちが、地域の達人等を講師として共に活動することを通じて、相互理解を深め、障害のある子供たちの充実した地域生活の実現を目的としたものです。

この事業を、二つのステージに分け、合計八回実施しました。各回、児童生徒、保護者、職員合わせて百名から二百五十名近い参加者があり、大変盛況でした。P A単独ではなく、学校の職員も企画、運営に積極的にかかわる

ことにより、スムーズに行うことができ良かったです。また、初級ボランティア養成講座（県教育委員会青少年課認定）も同時に行うことにより、継続的に参加するボランティアがいることで、親子とも安心して参加することができました。

## 発表三 西部地区代表 天竜養護学校

P A会長 中村 繁治

本校は、昭和三十年に、浜名郡赤佐小・中学校天竜荘分校として開校、昭和三十八年県立養護学校天竜分校となり、昭和三十九年県立天竜養護学校として独立、昭和五十四年訪問教育開設、昭和五十五年高等部開設、昭和五十八年聖隷訪問学級開設、平成十一年高等部訪問学級開設という経過をたどりました。

本校は、病弱の養護学校として開設され、慢性的呼吸器疾患、腎臓疾患および神経疾患、悪性新生物その他の疾患の状態が継続して医療、または生活規制を必要とする児童生徒を対象としています。

小・中・高等部があり、独立行政法人国立病院機構天竜病院で治療する生徒が対象です。医療と教育が一体となり、病気治療中の学習遅滞が生じないように一般の小・中・高等学校に準じた教育を行っています。

特色あるP A活動としては、専門家を招いての音楽鑑賞七回、放課後のスポーツ活動二十六回、長期休業中の

活動、P A カルチャー講座七回等実施しました。

親睦の面、学校理解促進の面、生涯学習の場としての学校等、成果が見られました。課題としては、保護者が、全県下にまたがっているのに、遠方の保護者にとって参加しやすい工夫をしていく必要があります。

賀茂地区 於 下田市民文化会館  
七月六日(火)  
参加者 二一〇名

研修テーマ

「笑顔のためにできること」

一 開会のことば

下田北高 P T A 副会長

石島 専吉

二 当番校 P T A 会長あいさつ

下田北高 P T A 会長

大川 富久

三 賀茂地区代表校長あいさつ

下田北高校長

田代 攻

四 来賓あいさつ

県高 P 連副会長

栗田 正己

五 P T A 指導者研修会報告

下田北高 P T A 副会長

大川 博



開会あいさつ

六 基調講演

演題「思春期にクリアしなけれ

ばならない同一視という

発達課題」

講師 房間 貞 先生

(講師紹介) 房間先生は、富士高校から、同志社大学で心理学を専攻し、県職員として、心理判定員、セラピストを経て、現在、臨床心理士資格を取得し、スクールカウンセリングを行っています。

一人の心の発達段階

基本的信頼感の形成は、生まれてから一歳までが大切で、乳児の心を育てる満たされた母子の愛着関係を築く。

自立心の形成は、2歳頃までで自己主張をしたり、何でも自分でやり

たがり、人見知りをしたり、幼児期前期の特徴です。

自発性、積極性、良心の形成(2歳~6歳) 第一反抗期、主体性の確立(2歳~3歳)

社会的ルールを学ぶ。(4歳~6歳) 保育園、幼稚園で友達を作り、喧嘩、我慢を学ぶ。

勤勉性 意欲の形成。(6歳~12歳) この学童期に勤勉性と意欲を形成する。

自我同一性の形成。(13歳~20歳) 思春期から青年期に「自分とは何者か」を明確にする。

以上のように、幼児期の母親の愛情とスキンシップが大切で、子育てがうまく行かないと虐待に走ってしまったりするケースも多い。

2~3歳でてこずった子(自立心が強い子)は、主体性が強くなる。最近、成人式で暴れるのは、幼児期に社会的ルールを学んでいない現われで、心はまだ子供。

学童期には、先生以外の回りの人からも、スポーツからも多くを学ぶ。

成人になるまでに、自分のモデルを探し、家庭の調和が取れている場合は、父母を尊敬する理想の人とする傾向がある。

これらが一つ一つクリアしなければ成らない発達課題である。

第二項では、親子関係の同一視が失敗した例を家庭画を子供に描かせて分析する技法を説明致します。

二 家庭画に見る親子関係と家庭機能の問題

「家族皆で何かをしている絵を描いてください」と子供に指示をして、問題行動を持つ児童の家庭画を見ながら、親子関係を考える。

8枚の動的家族画を見ながら家族構成、家族の力関係や、今の自分の置かれている立場や心の問題を指摘していきました。抜粋してみます。

不登校の児童の場合、家族が食事の時、まったく違うこととしていて、自分はその部屋から出て行くところを描く。知らず知らずの内にバラバラな家庭で、母親にがんじがらめにされて自立したいと思っている。

家庭内暴力の場合、父親は無頓着、母と弟に暴力をふるい、僕は王様となる。

その他、非行。心理的虐待。身体的虐待。性的虐待。ネグレクト(放任、無視)など様々な例を家庭画から観察し学びました。絵は心に有るものを映し出す様です。

三 親子関係で、良い聞き手になるために

ア 子供と信頼関係を結ぶために  
「忙しいから後にして」では、何も聞いてくれないと思ひ、会話や対話が少ないのはよい信頼関係を結べない原因となる。

事実の把握に努める。  
何に悩んでいるか、問題にしていることは何か、主な訴えは?聞いても

りたい内容は何か。事実の把握のために、決して取り調べにならないように注意して、非指示的に聞く。



講演会 房間 貞 先生

潜在的治療力を信じる。

誰もが自分の問題を自分で解決する力を持っている。

共感的理解。

ねぎらいの気持ちを持ち、共感しながら、子供の感情を汲み取る。

積極的傾聴。

初めは、子供が「はい」と答えられる内容から入る。最大限の自己表現が出来るように傾聴する。

ペース合わせ。

目で見て、耳で聞き、体で感じるペース合わせ(呼吸合わせ)をする。

純粋な立場。

偽りや駆け引きの無い誠実な関係を持ち、真心のこもった関係を保つ。

よい聞き手になるためのテクニク  
聞き上手の人は、相槌がうまい。話上手である必要は無い。

うなずき方や温和な表情が受容や共感に効果的に作用する。

相手の言葉のオーム返し「〜ということなんだね」を的確に使って共感に更に深まる。聞いてもらえているという気持ちになる。

「なるほど」「それで」など子供の調子に合わせる事が重要。話の途中で批判や先入感を挟まない。

過去のことを自ら語っている時は、丁寧に聞く。自分の過去を振り返ることで客観的に自己を評価し、自ら問題に気づく場合がある。

同じ事を繰り返し言う時は「〜ということかな」と返してみる。「そう言いたかったんだ」となる。

黙り込んでしまった時は「話したくなるまで待つから」とその状況を受容しねぎらう。「黙っていたら解らない」は禁句。

面談は長くても45分、1時間として休息を入れるか次の話し合いの約束をする。

継続した話し合いは、1週間の間隔が望ましい。

どうしても気持ちが噛み合わない時は、ズルズルと面談を繰り返さないで、人を変える。

最後に素晴らしい親子の信頼関係を築くために、「あなたメッセージとわ

たしメッセージ」をしつかり区別して使って下さい。

「あなたメッセージ」とはあなたが主体で(相手に対して)「こんな時間まで何していたんだ」「おまえ携帯有るんだから連絡ぐらい出来るだろう」と相手のことを攻める言い方に成ってしまします。

「わたしメッセージ」にすると、こちらの気持ちを相手に伝えるように「心配で食事もしないで待っていたのよ」と相手に諭す。

感情を出してしまうと、心に染みとおらない「あなたメッセージ」になってしまします。

常心がけて、「わたしメッセージ」を子供たちに伝えられるように努力して行きましょう。

子供は家庭での姿と、親たちの知らない外で見せる姿と違う場合が有ります。「うちの子に限って」とか、「そんな事をやっているのは知らなかった」とよく親が言っています。

地域、学校、PTA、そして保護者、家庭との連携を取り子供を育て、教育していく事が必要です、大変重要な課題です。

閉会のことは

松崎高校PTA会長 齋藤 郁美

三島地区 七月七日(水)  
田方地区 於 熱海高等学校  
参加者 一五〇名

研修テーマ  
「人としての在り方・生き方」を学ぶ

一 全体会

開会のことば

熱海高校PTA副会長 小野 達也

挨拶

静岡県高P連会長 豊岡 武士

静岡県高P連地区世話人理事 三島北高校 栗田 正己

静岡県公立高等学校校長協会理事 三島北高校 山田 勝造

PTA指導者研修会報告 熱海高校PTA会長 宮崎 彰

一 分科会報告

第一分科会

「家庭にできること、学校にできること」

司会 土肥高PTA会長 小泉直樹

助言 土肥高校長 長谷川勝治

報告 土肥高校PTA 増田みさ子

発表者より

子どもには夢や目標を持ってもらいたい。そのためには、子どもが成長す

る過程の中で、親自らの社会体験などを話すことが大切であり、それにより子どもと夢や目標について語る事ができる。

各高校の意見より

- ・親が何でもオープンに話してあげないと、子どもに誤解が生じる。
- ・褒めることで子どもが変わった。
- ・誰かを悪者にして、自分の正当性を主張するのは良くない。

助言者より

親は距離感を測りながら子どもとの位置関係を見るべきである。また「体力」をつくること、子どもに安らぎの場所をつくってあげること、親の価値判断を示すこと」も大切である。

第二分科会

「家庭にできること、学校にできること」

- 司会 長泉高 P T A 会長 渡辺一博
- 助言 長泉高校長 吉永清貴
- 報告 長泉高校 P T A 穂坂三枝子

発表者より

教育の土台は家庭環境にあり、しつければ家庭で自然に培われるものである。そのため善悪の判断は、社会の中で見せる親の姿勢から、身につけさせなければならぬ。

各高校の意見より

- ・学校と家庭では良い生徒だが、それ以外(地域)での直接大人の目の届かない場所での生活が心配である。
- ・子どもたちには「横並びの意識」が

強く根付いており、自分だけが良い子になれないと感じている。  
・学校・家庭でのあり方に共通理解と共通指導が必要である。

助言者より

子どもたちへの声かけ、接し方、向き合う時間を大切にしてほしい。家庭と学校の役割はさほど変わるものではなく、教え与えることは同じである。

第三分科会

「P T A 活動を通じた家庭・学校の連携」

- 司会 田方農高 P T A 会長 清水佑一
- 助言 田方農高教頭 村野好郎
- 報告 田方農高 P T A 井上均



第三分科会の風景

発表者より

家庭の事情で P T A 行事に参加することが難しい保護者に対しては、場所

や時間等で特例を作るなどの工夫をしたらどうか。また地区懇談会の参加率を高めるにはどうしたらいいのかという話を話し合った。

各高校の意見より

- ・教員と保護者による登下校時の指導により交通事故が減少した。
- ・文化祭で P T A コーナーを設け、地場産品等を販売し、売上金を生徒へ還元している。

助言者より

学校行事等への参加をさらに活発化させ、膝をつき合わせた話が出来るといいうにいろいろな工夫をしていく必要がある。家庭・学校が一緒に何かを行うだけでなく、それらを活用してこそ意味があるのではないだろうか。

第四分科会

「P T A 活動を通じた家庭・学校の連携」

- 司会 伊豆中央高 P T A 会長 渡辺達之
- 助言 伊豆中央高校長 藤本雅道
- 報告 伊豆中央高校 P T A 藤巻哲雄

発表者より

地区懇談会・生徒の職業観・学校開放・父親の参加の四点について話し合った。

各高校の意見より

- ・ P T A の方々に生徒たちの様子(授業・行事)を見てもらっている。また積極的に参加してもらっている。
- ・地区懇談会の参加率が少ない。協力

的な方は参加してくれるが、色々な意見が聞きたい。

助言者より

子どもに対する姿勢として、子どもが助言を求めてきたら親も耳を傾け、一緒に考え、一緒に勉強することが必要である。これからは男女共同参画社会を目指していく必要がある。父親の行事参加率についても、積極的に学校の方から呼びかけをしていけば参加者も増えるのではないだろうか。

一 全体会

- 講演 「高校生の親として」
- 講師 子育てアドバイザー 滝井なみき

思春期に入った子どもは家の中での会話が少なくなるため子育てが難しい時期になる。その中で最も大切なことはしつけをする前に親が子どもをしっかり把握することである。子どもは「快と不快」の感情バランスの中で生きている。子どもにとっての「快」が多すぎると、つまり甘やかしが多くなると引きこもりなどが増え、また愛情不足などの「不快」が多くなると自ら「快」を求め、暴走族や殺人などの問題行動を起こすようになる。大器晩成のイメージを持ち、親がイライラすることなく明るく接していくようにしたい。



「高校生の親として」講演会

来賓あいさつ

県高 P 連副会長 栗田 正巳

県 P 指導者研修会報告

沼津商業高校 P T A 会長

鈴木 延孝

二 講演会

「若者の体力低下 たくましさとは」

講師 東海大学開発工学部助教授

光本 健次 先生

(講演内容)

若者の体力低下は深刻な問題である。

週一回の運動だけでは効果はない。健康で長生きしたければ大腰筋を鍛えることが大切。

トータルヘルスの概念

フィジカルヘルス

メンタルヘルス

ソーシャルヘルス

現代人の健康のあり方

健康な体と心

健康な家族関係人間関係

安定した経済生活

モラルの教育も含めて家庭教育がとも大切である。

青年期に体をしっかり鍛えておくことは働き盛りに活力と生活に余裕が出てくる。(運動をしましょう)

運動不足で衰退する若者の身体機能

・心肺機能の低下

・予備力余裕力の低下

・生活習慣病予備軍の増大

・肥満・やせすぎ増加

・心への悪影響



講演する光本講師

大学生を見ていると体を最小限にしか使わないので筋力が低下し、耐疲労性などの抵抗力が低下し耐病性も低下しているという。加えて悪い食習慣とストレスのせいで健康チェックしてみると「健康管理を続けて健康状態」つまり半病人半健康状態という生徒が平均的である。授業中寝ている生徒が多いがこれも体力低下の現れである。

たくましさとは次のとおりである

・身体的なたくましさ 目的を達成するために力強く粘り強く行動できるたくましさ。

・精神的なたくましさ 度重なる失敗やいじめに対し深刻にならないよう対応できるたくましさ。

・自律的なたくましさ 意識とは無関係に自動的に働いている自律神経

経系のたくましさ

第一分科会(沼津商業高校担当)

「家庭教育のあり方について」

司会 P T A 保体委員長 山本 敦子

基調説明 P T A 副会長 加藤 敦子

書記 P T A 総務委員長 加藤 恵子

発表者 P T A 地区長 岩田美佐子

助言者 沼津商業高校校長 土屋 尚志

沼津聾学校校長 平澤 正

テーマ設定の主旨

現在の高校生を取り巻く生活環境は少子化、情報化、国際化などが急速に進んだ社会情勢の中で大きく変化しています。学校週5日制となり、学校、家庭、地域社会の連携や教育力が指摘されています。他人との関わり合いが重要な時代の中で、どこまで家庭教育をすべきなのか、家庭教育のあり方について考えていきたいと思えます。

参加者の意見

時間があまり無く、テーマの範囲が広がったためか、あまり活発な意見が出ませんでした。その中で、子供との会話が必要であり、コミュニケーションを取るこの大切さ、そして、父親との関わりがとて重要なポイントになっている等の意見が出ました。

また、学校・家庭・地域が一体となつて子供のために取り組むことが大切であり、親と先生間の話し合いができる

沼津地区 於 沼津市立図書館  
駿東 参加者 二二三名  
七月一日(木)

講評  
伊豆中央高校長 藤本雅通  
閉会のことば  
伊豆中央高 P T A 会長 渡辺達之

一 全体会  
開会の言葉  
御殿場南高校 P T A 会長 村上 武

あいさつ  
沼津高校 P T A 会長 斉藤 孝一  
沼津高校校長 田中 保幸

ようにすることが大切との意見も出ました。家庭教育というテーマと、戦い続けなければいけないと感じるとの考えも出ました。

助言者より

響学校の生徒はとても素直。子は親の一生懸命さを見て育っている。その姿を見て子は育つ。その一連の流れが家庭教育ではないか。そして子供の話を素直に聞いてあげることも大切。あとは、家庭円満であり、子供の手本になるように生活することである。子供とは、幼・小・中の時にたくさん話をすれば良い。高校生になったらカウンセリングマインド(話を聞いて助言をする)立場で接すれば良い。

皆、自分に自信が無いので、違う方向へ行ってしまう。お互いに何を求めているか、とことん話し合い結論を出したい。子供たちのことをもっと考えていきましょう。

第二分科会(沼津商業高校担当)

「交通安全にPTA活動について」

司会

PTA 研修委員長

田村ゆかり

基調説明

PTA 副会長

坂牧三千代

書記

PTA 地区長

川嶋 美紀

発表者

PTA 総務・広報委員長

清水 壽一

助言者

御殿場高校校長

青島 裕

裾野高校校長 岡本 行司  
沼津城北高校校長 杉浦 秀弘  
テーマ設定の趣旨

交通事故多発県静岡の中において、高校生の自転車通学の安全教育は大変重要である。県内の高校生の約78%が自転車通学者であり、また部活動などの移動にも使用されることから、自転車は高校生にとってなくてはならない交通手段である。しかし一方で、高校生の交通事故の約3分の2が自転車乗車中に発生していることも事実である。このことから、自転車に関する交通安全の必要性が問われている。

参加者の意見

・各校の取り組みを発表していただいたが、年2回の街頭指導は全ての高校で行われており、保護者と教師のみでなく、生徒会が率先して実践するというケースもあった。

・親子のコミュニケーションが少なかつた中でも、登校時の「いってらっしゃい。気をつけてね。」の声かけはやはり重要である。

・危険な場所そのものに改善が必要な場合は、進んでPTAが学校、地域、行政へ報告するよう働きかけが必要とされる。

助言者より

・街頭指導などに進んで参加して欲しい。自分子ども達だけでなく、他の生徒達の登校状況を把握することにも意味がある。

・命にかかわることなので、「ルール

とマナー」についてご家庭で話し合う機会を設けて欲しい。そして人思いやる心を学んでいただきたい。・自転車の無灯火走行、盗まれたから盗むという安易な行為、商店街での違反走行などについて話し合い、注意を促してほしい。



分科会の風景

第三分科会(御殿場南高等学校担当)

「魅力ある学校づくりとPTAの参画」

司会

PTA 会長

村上 武

基調説明

PTA 副会長

村上 武

書記

PTA 副会長

関 富芳

発表者

PTA 副会長

鈴木とし子

助言者

御殿場南高等学校校長

大村 正順

沼津西高等学校校長

杉本 一美

沼津工業高等学校校長

山本 忠義

テーマ設定の趣旨

今後も少子化が進むことが予想される中、子供たちが「進学するならば、あの高校に」と自主的に決定する時代が近づき、その選択肢の一つに、「あの高校は魅力ある学校だから」ということが考えられます。

「進学率」で、「就職率」で、「スポーツ」でと、本人が学校に関して興味を持ち、自分の意志で高校を選択するとき、その目標に向けての真の努力が生まれると思います。

そこで、本分科会では、「魅力ある学校づくり」にPTAがどのような形で参画できるか、参画すべきかを考えていきたいと思えます。

発表内容

御殿場南高等学校PTA年間事業紹介  
ディスカッション

各校の事例を基に、特色ある各事業に焦点を当て、事業実施後の成果について発表してもらいました。

文化祭にバザーや模擬店を実施したり、マラソン大会の交通整理、とん汁作り、PTAが積極的に参加したり、親子球技大会、PTAパソコン教室の実施、外部模試には保護者が答案用紙の配布、回収、集計、監督をする学校もあり、これには、生徒が緊張を持つてテストを受けることができ、保護者も、生徒が真剣に机に向かっている姿を見ることができ、継続していきたいとの報告もありました。

体育大会ではPTA支部対抗リレーで

親子が共にかかわるような行事を実施することでPTAの参加率が大変良くなっている学校もありました。

限られた時間の中でも各校の特色ある事業報告ができ、参考になる分科会でした。

第四分科会（御殿場南高校担当）

「高校生のマナーと頭髪・服装について」

司 会 PTA副会長 勝又 茂  
基調説明 PTA副会長 勝又 茂  
書 記 PTA監事 瀬戸 喜芳  
発表者 PTA副会長 土屋 昌代  
助言者

小山高等学校長 松下 彰  
市立沼津高等学校長 田中 保幸  
沼津東高等学校長 大川 輝之  
テーマ設定の趣旨

学校には、生徒の通学時の電車内でのマナーに関する苦情が多く寄せられているという。電車の中大声で話をする。携帯電話を平気でかけている。座席にバッグを置いて他の人を座れなくする。また服装・頭髪についても乱れた装いの生徒が目立つようになっていく。女子の茶髪、化粧、ピアス等、スカートについても短いなど、男子も茶髪、スポンをずり下げて（通称・腰パン）など、司会者より「親にとっても学校にとっても重大な関心事になっているのでテーマについて皆で認識を深め共理解のもと解決策を見出していきたい。」との問題提起あり。

### 参加者の意見

まず、共通認識として全部の学校でテーマの問題はあるという事、その中のある学校ではピアスを集めたら売るほど出てきた。その他報告で4月に比べて、2、3ヶ月で頭髪とか服装に違いが出てきた。家を出る時はチャーンとしているが学校に着く間に変身する又、伊豆地域では、観光地ゆえに他よりひどい環境がある等、貴重な意見が出された。いずれにしても全ての回答として家でのしつけ、社会でのマナー、学校含め、育っていく過程での環境が大事だという事。補足として日本文化では、パーティとか家庭で家族全員が着飾る場（事）が無い。TPOで欧米との違いがあるとのまとめを出した。

### 助言者より

生徒は授業を受け、部活動を一生懸命やる事が普通と考えると、学校の先生は授業を行い部活動を教えることが大事で、そのほかでマナーを教える。街頭に立つ、校内に立つ注意を日常行うこれが本当の先生の姿でしょうか？私立は校則を守らなければ退学させるとか厳罰があるが、公立高校は個性を大事にする部分がある。そこを理解して頂き家庭でのアドバイスをお願いしたい。社会の移り変わりのスピードを高校生だけに求めるのも難しいが、本当にダメな事はダメ、校則に反している事は反していると注意はしていく。その分、部活動で夜遅くまでガンバツている事とか、挨拶していることは大

いにほめてやりたい。最後に司会者より「結論は出せないが、学校として全体の場での三者会談を是非行なって欲しい」という事で終了した。

九月二十四日（金）  
富士地区 於 ロゼシアター  
参加者 二一八名

### 研修テーマ

「健全な自立心を育む家庭  
学校・社会の在り方」

### 一全体会

#### (一) 開会のことば

富士見高校PTA会長 佐野 則男

#### (二) あいさつ

吉原高校PTA会長 宮川 洋之  
県高P連副会長 栗田 正己

### 二、講演会

「ただひたすらに祈ります」

塩川 甫 先生

元静岡県企画調整部青少年対策室

主席指導主事

元静岡県立静岡贄中学校長

自立心を育むとは、

他人に頼らず、自分で生きる力を持たせる。

しっかりと自分の考えを持った人間にする。



全体会 講演 塩川 甫先生

困難に負けない強さを持った人間にする。

自分に対する自信と誇りを持った人間にする。

目標を定め、その実現に向かって、コツコツと努力する持続力を持った人間にする。

ことである。子供には、生まれながらに自立心があり、それを伸ばせられないのは、大人の責任である。

現在の物質的に豊かな社会の中では、子供たちは我慢したり、努力しなくても欲しいものが大抵手に入り、目標や夢が持ちにくい状況にある。そして、少子化や核家族化によって、子供に絶対必要な、共に育ち合う環境も失われている。その上、大人のあれもダメ、これもダメといった否定的な言動や、子供に体験させず先回りしてしま

う過保護な態度がますます子供たちの自立心を損なっている。

このような中で、自立心のある子供を育てるには、親と子の関係、教師と生徒の関係を見直し、子供たちと真正面からぶつかっていかなければならぬ。教えたり、たしなめたりする時は、まず聞く気にさせて、子供の心に訴えていくこと。子供から話しかけられたら、どんな時でもどんなことでも心から聞くことが大切である。

第一分科会

『自立心』再考』

発表者

吉原工業高 P T A 会長 齊藤 勝彦  
「自分を厳しく律する人こそ自立心旺盛な人と言える。」

学校・親・地域が一体となって経験の場を持たせてあげたり、横からすぐ口出しをせずに、自分で考えさせ、判断できるような人になれるよう待つてあげる子育てをするべきである。

健全な自立心を育むためには、自分の殻に閉じこもらず、家族でのコミュニケーションや、地域との関わり等、いろいろな経験の場を与えてやり、その中で、他人への関心・愛着・信頼感を得ることが出来、自分自身の役割というものを見出すことも出来るようになると思う。

物が溢れている現代、つい子供が欲しいという物を与えてしまったり、子供の要求に応え続けてしまう。健全な

金銭感覚を身に付けさせるよう、時には我慢をさせたり、自分自身でよく考えさせる。そして、責任を持った生活が出来ると、基本的な生活習慣を身に付けさせることも大切である。



第一分科会 吉原工業高校 P T A 会長の発表

当初、高校生に求める自立心というものを考えてきたが、我々大人も、果たして、健全な自立心を持っているかどうか考え直すべきではないだろうか。

助言者

富士宮東高校教頭

吉原高校長

富士見高校長

助言内容

人と人とのつながりを大切に、その中で自分の役割を見つける。地域社会との関わりを持つ。親が率先すれば子供もついてくる。

杉山 克喜

水上 重夫

竹谷 勝

自分を律することが大切である。自然体験、社会体験、子供会活動などの地域活動が重要である。自立心を育むには、どこで手を出し助言するかが大事。出番を見極めること。自立心を育むには経験の場を与える。

第二分科会

「子供の進路と家庭・学校の関わり方」

発表者

富士高校 P T A 会長 池田 隆芳  
富士地区の進学校と専門校の二校で、進路意識に関する同一内容のアンケートを実施した。

卒業後の進路について、進学校は 100% 進学希望、専門学校では約 50% となっている。

進路を考えていた時期は、進学校は小・中学校から、専門学校は高校生になつてからが多い。

親と子供と教師が将来の事について早い時期から話し合うことが必要。進路選択時、大多数の生徒が相談相手はいると回答している。相談相手は親が一番で、友人が二番であった。

インターシップに参加してみたい子供は半数以上いた。

フリーターは社会問題化している。できれば自分の子供には、安定した職業についてほしい。

助言者

富士宮西高校長

鈴木 敏彦

富岳館高校長 園原 幸寿  
吉原工業高校教頭 三瓶 良一  
星陵高校長 坪井 正明

助言内容

子供は親の背中を見ている。知らず知らず口調が親と同じになっている。自分の良さを見つめさせる。困難を乗り越える力、強い意志を育てる。子供の話をよく聞く。自分に合った仲間を見つける。子供の夢や可能性を伸ばすことが大切。子供は自分を理解してくれる人にしか話さない。

インターシップは、将来の職業を決めるのに必要。良い所だけでなく、いろいろな場面を体験させてあげたい。一日だけではなく数日間の体験が望ましい。

将来への目的を抱いてフリーターをしているケースについては否定しない。学校は、家庭に十分進路情報を提供する必要がある。

第三分科会

「親の自立と子供の自立」

発表者

富士宮東高校 P T A 会長 有賀 一正

「今時の子供は」と、社会批判の対象となりがちな子供を育てているのは私たち親なのです。日常生活の中で、もう一度、子供たちとの関わり方や、役割を見直してみることが必要ではないか。親が毎日の生活の中で愚痴ばかり

り言つてはいないか、家族だからとわがままも通用すると、感謝、思いやりを忘れていないか、そして一日を前向きに明るく過ごしているか。親のそんな言動を子供はしっかり見て何かを感じているのでは。アンケートを通して様々な意見がありました。家庭環境によつてこれが正解といえるものではありませんが、これを機に各家庭で、「自立」について話し合ひつきっかけになってくれたらと期待しています。

助言者

富士宮北高校長 日野原 力

富士東高校長 河西 哲郎

吉原商業高校長 飯塚 和子

富士養護学校長 名倉眞一郎

助言

雨の日の子供の送り迎えの当否については、各家庭の事情、環境により異なる。親の過保護とばかり決めつけられない。ただ、何でも親が先回りして、子供のためにしてやるばかりでは、子供自身が考えて行動することができなくなる。親は良く考えて、時には我慢しながら、社会に出て自立する前に、自らの家庭で、子供が自立できるように見守っていくことが必要ではないか。



清水地区 九月十七日(金)  
 於 マナーハウスエリザベト  
 参加者 二〇五名

テーマ

『高校生の健康とスポーツ』

＝ 感動すること ＝

一 開会式

あいさつ

清水東高校PTA会長 瀧 康晃

清水東高校長 清水 尚彦

県P連会長 豊岡 武士

二 基調講演

『高校生の健康とスポーツ』

＝ 感動すること ＝

水の道化師

オフィス・トゥリトネス主宰

不破 央 氏

幼い頃から水泳競技の素質を見いだされ小学校卒業後は特別指導を受けるため親元を離れ上京。順調に思えた競技生活も大学で挫折。様々な経験を経て復活し、平泳ぎの日本記録を樹立するなど大活躍する。

その後現役引退を機に海外青年協力隊の一員としてグアテマラ共和国に派遣される。文字通りゼロからの出発。はじめはよそ者扱いした現地の方々に少しずつ溶け込み、受け入れられていく。水泳を普及させ、やがて世界レベルの選手を育成するまでになる。

帰国後、紆余曲折を経て『水の道化師 トウリトネス』を創設。



講演する不破氏

最近では映画やTVドラマの『ウォーターボーイズ』のシンクローを指導し、特別番組では不破氏自身も画面に登場し、番組に出演している高校生俳優と達成感を分かち合うなど感動的な場面も放映されている。彼の真骨頂(?)である、変則泳法もコマースヤルに起用されるなどかなり注目を集めている。

不破氏の驚異的なバイタリティとユニークな体験談、パントマイムやパフォーマンスを交えて語られる数々のエピソードに、はじめは少し構えていた参加者も、次第に引き込まれて行く。数々のヒストリーを『縦糸』に、下積み時代に、身にしみてうれしかったという父親との関わり、グアテマラ共

和国で受け入れられるまでの人々との戦いにも似た駆け引きや子どもたちとのふれあいなどを『横糸』にして、不破氏は一気に九〇分を語りきった。

最後は、ドラマでシンクローを指導する中で高校生世代の若者たちの健康や、撮影でのペース配分やモチベーションの高め方などでは、互いに認め合い信頼関係を形作っていくことが最も重要なこと、と今回のテーマに添った形で締めくくられた。

「理論や理屈ではない。私は、正面から向き合う。カッコいい大人」に出会った、わたしもそうありたい。」というフレーズが、参加者の心に響いたようだった。

三分科会

十六のグループに分かれて、

講演の感想などフリートークで 不破氏のセッションの高さに導かれるような形で、活発に意見が交換された。

講師の不破氏もテーブルに入っていた。ただき(ご本人は講演会の第二幕：とおつしやったとか・・・)参加者の声を聞き多めに語った。

ドラマの為に不特定に集められた若者たちにもどのようにシンクローを指導したのか、というような具体的な方法などに質問は集中したようだった。

中には水泳の初心者同然のメンバーが居たり、タレント同士のプライドのぶつかり合いもあったことなど、現場

ならではの話題を交え、肩肘張らない「本音でトーク」が繰り広げられた。



不破講師・豊岡高 P 連会長と共に

四 全体会  
全体会は助言者の先生方のご紹介のあと清水西高等学校長の吉本秀樹先生からお言葉をいただいた。

五 まとめ  
高 P 連指導者研修会は各校の当番制となつて企画運営されているが、六年に一度では経験者が残つて居ることは希で手探り状態でスタートせざるを得ない。我々スタッフは昨年度二月に準備会を発足させテーマづくりと講師の決定依頼を進めた。手元には昨年の担当校から「引き継いだ」資料 F D が一枚。担当者は、資料の読み込みから必要フ

まず、二百名を集める会合にしては予算が無い。今回は不破央氏という願つてもない講師を招聘することができたが、少ない予算ではお招きする講師も限られる。結局 P T A 会計から相応の負担をする事になる。  
幸い本校では、P T A 総会において適切な説明を行い会員の承認を得る形で予算化が実現した。毎年それなりに担当校は苦勞をされていると思うが、敢えて、ここで費用についての問題提起をしておこうと思う。  
もう一つは事務処理についてだ。参加者一覧表や座席表などの作成についても少し提案をしたい。  
研修会実行の担当を任せられたときにはまさか、レジメ作成までするとは思つていなかった。結局データ打ち込みや印刷については役員の中で作業の分担をしたが、想像を超えて大変な作業量だった。しかも、開催間際まで参加者が定まらずに変更が出る。本校 P T A 会長は、参加される方にできるだけ失礼のないようにと、名簿にはずいぶん配慮をした。  
現在のようないコンピュータ社会では、参加者名簿は各校が決まった形式で作成し電子データで提出するような合理化を考えても良いと思う。  
各校で提出されたデータは、呼び込み方をアレンジして座席表にもなるし、懇親会等への参加名簿にもなる。そのままレジメに使用すればデータ作成の作業はかなり楽になる。



分科会の風景

写真を見返すと、懇親会の席で不破氏が「陸ダンス」なるドラマ最終回の

今回はデジタルカメラで数百枚の撮影をし、写真データは CD-R に焼き込んで各校に配布させていただいた。最初から最後まで網羅しているのが、次年度の担当校には多いに参考にしていただけることと思う。  
役員会での準備会を経て七月 P T A 評議委員会を中心として実行委員会が発足した。休み明けの直前委員会で、分科会の進行と書記の担当者の為のシミュレーションとして分科会のように一〇人程度に別れて「高校生の健康・夏休みを終えて・・・」と言ったテーマでフリートークをして、おおいに盛り上がった。研修会が成功したのは、委員スタッフが運営に前向きに取り組んだからこそだと確信している。

振り付けを伝授する場面がある。楽しそうにジャンプする参加者が写っている。それを見ると、ドラマ最終回のテレビの前で子どもさんと親子で話している姿が想像される。  
P T A 活動の基本中の基本は、子どもとの会話やコミュニケーションだと思つている私にとつて、その意味でも今回の研修会は大成功だと思つている。

十月二十九日(金)  
静岡地区 於 ル・ヴェールたちばな  
参加者 一九四名

研修テーマ  
「開かれた学校づくり」  
生涯学習社会と P T A  
生涯学習体系における高等学校教育の充実を目指し、学校、家庭、地域とのより深い結びつきを模索する。  
一 開会式  
司会 松田 清孝(静岡西高教頭)  
開会の言葉  
静岡西高 P T A 会長 朝波 光治  
来賓挨拶  
県高 P 連顧問 山口 茂  
世話人校長挨拶  
静岡西高校長 鈴木 利貞

日程説明

静岡西高 P T A 副会長 本川 弘志

二 全体会(基調講演)

「開かれた学校づくり」

生涯学習社会と P T A  
常葉学園大学副学長

角替 弘志 氏

「開かれた学校づくり」には施設・設備の開放と、教育機能の開放という二点がある。前者は運動場、体育館の開放、後者は市民講座の開講などである。



講演会(角替 弘志 先生)

近年、学校評議委員制度の導入や、地域運営学校という考えが入ってきた。特に防災などの面で、学校が地域にあることが、地域住民に対して絶大な安心感を与えており、災害時における高校生の力が大いに期待されている。

る。

最近の子供たちは、生活体験が乏しく、「生きる力」の育成が懸念されるが、それは、むしろ学校教育よりも、地域・家庭教育においてこそ育成されるべきものである。子供の持っている能力を信じ、十分発揮される場を、家庭・地域、学校の三者が連携して摸索することが肝要である。

三 グループ協議

各会場では、同一のテーマで協議した。

第一会場(参加者三十二名)

司会 朝波 光治

(静岡西高 P T A 会長)

記録 松村 統子

(静岡西高 P T A 広報委員)

助言 増田 嘉徳

(静岡農業高校長)

討論・協議

- ・ 今の子供は実体験が不足している。
- ・ 生きる力の醸成のために様々な経験をさせる必要がある。
- ・ 手作りの行事をやり遂げたり、違う年齢の人たちとの関わりを通したりして大きく成長することができる。
- ・ 高校生の力は大きいので、防災訓練等に参加する機会を作ることが必要である。

助言

自ら考え、行動する子供は、たとえ壁にぶつかっても、解決策を見いだし乗り越える力がつき、社会に出てから

も心配はない。災害時の生徒、家庭との連絡方法を普段から考えておくことが大切。地域の応急対策にも、高校生は頼もしい存在となるパワーがある。

第二会場(参加者三十一名)

司会 加藤 明海

(静岡西高 P T A 副会長)

記録 杉山千代美

(静岡西高 P T A 役員)

助言 村上 明夫

(静岡中央高校長)

討論・協議

- ・ 各学校でのいろいろな取組が参考になった。
- ・ 地域防災訓練に高校生が参加して、力を発揮できるようにしたい。
- ・ 学校内の行事に保護者の出席が少ない。
- ・ 保護者をいかに学校へ向けさせるか。特に父親も参加できる工夫が大切。

助言

「開かれた学校づくり」にたいして、保護者は何ができるかと、企画側に立つと考えにくくなる。もっと自由な立場で、学校に何をしてほしいかという方向から、考えていくと良い。学校が抱えている問題を、保護者も積極的に一つ一つ取り組んでいくことが必要である。

第三会場(参加者三十一名)

司会 足野 智男

(静岡高校 P T A 会長)

記録 小長谷恭子

(静岡高校 P T A 書記)

助言 萩田 裕一

(静岡商業高校教頭)

討論・協議

- ・ 各校とも新聞、広報誌、バザー等 P T A 活動を活発に行い、保護者が学校に行く機会を増やしている。
- ・ 学校は地域に施設を開放したり人材活用したりして、開かれた学校作りを取り組んでいる。
- ・ 各学校様々な取り組みをしているがまだ充分とは言えない。
- ・ 保護者と学校側が歩み寄って開かれた学校作りを実践していくべきだ。



分科会の風景

・ 防災面では高校生の力が期待されているので地域との結びつきを強めた

助言

実力をつけるには学力だけでなく  
体験を積み重ねる必要がある。その為  
に学校は開かれなければならない。そ  
れぞれの学校が実践していることを持  
ち帰り、各学校が考え直すきっかけに  
なれば良い。生徒の生きる力に結びつ  
けられるよう活動を広げていきたい。

第四会場(参加者三十二名)

司会 榛葉 英一

(静岡高校PTA研修委員長)

記録 高田三重子

(静岡高校PTA書記)

助言 松本 武

(静岡市立商業高校教頭)

討議・協議

・バザーや学校行事の時は、近隣地域  
に案内を出している学校は多い。  
・清掃活動や施設の訪問などのボラン  
ティア活動、地域防災に積極的に関  
わっている学校がある。  
・災害が起こった時、生徒たちをボラ  
ンティアとして出すことについて親  
としてどう思うかなど、これから考  
えるべき課題もあった。

助言

実験の乏しい子供たちが育ってき  
ているなか、保護者を中心として地域  
が学校とともに子供たちを育てていく  
姿勢が必要。また、学校が生涯学習の  
場として提供されることで、学校と地  
域の距離も縮まり連携も深まっていく  
と思われる。

第五会場(参加者三十二名)

司会 奥田 浩次

(静岡市立商業高PTA会長)

記録 近藤 充代

(静岡市立商業高PTA理事)

助言 深澤 秀明

(静岡南高校教頭)

討議・協議

・各校のPTA活動や地域と連携した  
様々な活動について報告があった。  
・PTAの人材を生徒の進路指導等に  
活用する。  
・大学教授や裁判官、地域の人を講師  
として生徒・保護者を対象に講演会  
を開く。

助言

他校の実践例を聞いて互いに参考に  
なったと思う。生徒指導は学校・家  
庭・本人の三者で責任を分担してい  
きたい。また、地域に関わる問題につ  
いては学校(親)からの一方的な要望を  
押しつけるのではなく、地域の要望を  
聞いて互いに協力していく姿勢が大切  
である。

第六会場(参加者三十一名)

司会 鈴木 重義

(静岡市立商業高PTA副会長)

記録 山本 幸子

(静岡市立商業高PTA理事)

助言 中村 国男

(静岡東高校教頭)

討議・協議

・各校の取り組みやPTA活動につ  
いて報告をしていただいた。  
・学校活動にPTAが参加することは  
子供の新たな発見や理解につなが  
る。  
・清掃活動や交通指導等にPTAだけ  
でなく地域の方々に参加して頂く事  
は、地域に生徒や学校を理解しても  
らう良い機会となるのではないかと  
地域から学校に期待している部分も  
ある。

助言

高校は学校ごと事情が異なり役割も  
それぞれ違うので、自分の学校の位置  
を確認して取り組むのが望ましい。  
近隣の方々との良い関係を築くには、  
学校行事の案内等でパイプを作り、愛  
される学校づくりに努めたい。また、  
隣接中学校の保護者が関心を持ってく  
れる様な学校のイメージアップを考え  
る必要がある。

志太 地区 七月二日(金)  
榛原 地区 於 藤枝市生涯学習センター  
参加者 一九〇名

- 一 全体会
- (一) 開会のことは

藤枝北高PTA副会長 増井 宏之

(二) あいさつ

志太・榛原地区高P連 会長 山田 勝郎

(三) 来賓祝辞

県高P連副会長 高岡美弥子  
志太榛原地区高校長協会代表 中山 一仁

二 講演会

「大人の純度」

講師 デンマーク牧場こどもの家  
施設長 松田 正幸 氏

子供達の置かれていく状況が、今、  
さらに深刻化している。社会的養護施  
設の最前線にたっている、松田氏が、  
もう何をやっても「手遅れ」であると  
言われたことが、衝撃的であった。そ  
れほど厳しい現実と直面して、まさに、



講演 講師 (松田正幸氏)

大人達はどっしりいいかわからないま  
までいるが、その厳しい状況の中でも、

氏は訴える。子供達に、自然の中での、根本の力をつけること(人間の五感をとりもどすということ)、子供達からは、とくに失われていった生産活動を取り入れ、それを活かすこと。以上の二点を重視する。

「立ち止まる実践」と言われても、最後は、大人達が子供達に「何を大切に生きているのか」を示し続けていくことが必要と痛感した。

### 三 分科会

第一分科会担当 島田商業高等学校)「部活動を通して、親子の絆を深める」

全体テーマ「学校・家庭・地域と連携し、共に学び行動するPTAを目指して」を受け協力校のPTAとして、「学校を媒介として、家庭と子供との対話を図る」をテーマに掲げることとし、サブテーマを「部活動を通して、親子の絆を深める」としました。部活動の盛んな島田商業高校の特徴を生かし、部活動に的を絞ってテーマを追求することとしました。そして部活動に参加している生徒と保護者の皆様に協力して頂き、研修報告としてまとめたいと考えました。三月に親が自分の子供の部活動について、どの程度理解があるのかのアンケートを実施しました。アンケートの結果で、最下位だった部活動の為の支援をしていますか」が、なぜこれ程低いのかを学校・保護者・子供に分け分析しました。そして、共通した原因として活動計画などの連

絡がうまく伝わっていないことが分かりました。現状分析で分かった下位五項目を改善することにしました。そして、目標を「知らない・していないの割合を各二〇〇以下にする」としました。部活顧問の先生の協力を得て部活毎に取組み内容を決め、親睦会等を五月十五日までに実施してもらうことにしました。五月十五日はPTA総会の日でもありました。

実施に当たり、PTA本部役員を部活動毎に割り振りをし原因追求で問題のあった学校・保護者・子供への連絡を徹底させました。具体的には、PTA本部役員が部活動顧問の先生と日時・企画を打ち合わせ、保護者の代表に親睦会等の趣旨を説明し参加への要請をしました。そして、各部活で親睦会・見学会・三者懇談会等を実施しました。これを受けて、六月の第一週に、子供の部活動について、親の理解に変化があったのかのアンケートを実施しました。その結果、親子の会話が増加したなど、全体的に大幅な改善がみられました。親睦会等の参加状況では、文化部の保護者の参加が予想していた以上に多く、また、コメントの記入状況からも運動部と共に三者の交流が深まり、将来に向け良い展望が開けたと手ごたえを感じました。

このようことから、親睦会等に参加して頂いた保護者には部活動に対する子供の頑張りや真剣な姿、そして活動内容を深く理解できたと思えます。

また、連絡の方法については、PTA広報委員会活動等を通して、「お知らせ」を徹底することにより今後の親睦会等にはより多くの保護者の参加を頂くことを実践したいと思えます。

副次効果として平成一六年五月十五日(土)に行いましたPTA総会の出席率が、前年の三八%から四六%に向上しました。これは、学校休業日である土曜日にPTA総会を行ったことに加え、公開授業・学級懇談会・部活動見学・親睦会等を組み合わせた結果だと思えます。学校の協力を感謝するとともに、次年度は、目標である50%以上の出席率に挑戦したいと思えます。

分科会参加者からは、この取組みに対して賞賛の声を多く頂きました。学校の活動内容をホームページを通して通知したらという提案もありました。

### 第二分科会

(担当 榛原高校)

「時代に即したPTA活動・学校との協力体制」

私たちPTAの持つ使命は、問題意識を常に持ち続け、様々な課題を諦めないでより良い方向に引き上げて行くことにあると思えます。

地域・家庭・学校が一体となった活動がどれほど重要であるかも様々な場で議論され検討が重ねられてきました。第二分科会では、それらを踏えた上で、特に学校との協力体制をどう考えるかについて、榛原高校の昨年度の活動を参考に話し合いを進めました。

各校共、学校週五日制の導入に伴い土曜補講という形で学習支援を行っている。また検討中だという報告がありました。さらに、地域を巻き込んだボランティア活動に力を入れている様子もお知らせ頂きました。そして、地区会が学校とのパイプ役として一つの重要な役割を担っているという学校、ある反面、地区会開催そのものが課題となっているという指摘もございました。

私たち榛原高校のスクールバス、学習支援等 大きな成果を生んだ背景には、PTAが寝食を忘れて努力する姿を、お互いが認め合えた所にあります。

鈴木校長の「学校お任せから共同参画の時代に、そして『共に学び合う事』が今後のキーワードである。」との総括を胸に刻みたいと思えます。

### 第三分科会

(担当 藤枝西高等学校)

「PTCAのすすめ」

未来に飛び出せ高校生、決められない進路、学校、家庭、地域の連携をいかにして、

PTCA活動のC(地域)と、どう関わっていくかというテーマで話し合いました。文化祭で、餅つき大会やバザーを行っている学校、生産した物を販売している学校など各校工夫を凝らして、特色ある活動をしています。

進路面では、地域の方々、OB、企業の人達に学校にきていただき、お話を聞くという学校も多くありました。

しかし、どの学校も人材集めには苦勞している様子です。

以上を受け、講評では企業の厳しさの話は生徒、教員にとってもよいことではないか。また、学校評議員制度を活用して意見を聞いたり、総合的な学習の時間で地域の方々に協力を呼びかけてみてはどうか、防災訓練などで地域と連携していけばどうか、との助言をいただきました。



第三分科会の風景

各学校でまだまだ試行錯誤の段階ですが、これからも活発な P T C A 活動がすすめられていくことと思います。

四 まとめ

藤枝北高等学校 P T A 副会長  
濱井 裕之

五 閉会のことは

島田商業高等学校 P T A 副会長  
高畑 惠美

七月一日(木)  
小笠 地区 於 静岡県厚子方広域研修センター  
周智 地区 於 静岡県厚子方広域研修センター  
参加者 一四四名

全体会

来賓挨拶

御前崎市市長 石原 茂雄

県高 P 連名誉会長 西原 茂樹

P T A 研修会報告

池新田高等学校 P T A 会長

河原崎尚已知

講演

演題 「二一世紀をどう生きるか」

講師 静岡産業大学学長

大坪 檀 氏

要約

今の日本は、不平不満がつのり、少子化がらみの年金問題を抱えており、生産性もあり経済的に豊かになつたにもかかわらず、商店がつぶれてしまつという状況にある。今までの概念の違ひから生じるギャップがある。

この十年間で、日本は新しい時代に踏み込んだといえる。日本はこの半世紀で、長寿健康など、すばらしいものを手に入れた。日本人は、明治維新の時に、その世の中にあきらめを見せて

いたが、教育改革を行い、寺子屋から義務教育へと変え、当時日本だけは他国の植民地にならないという強い意志を持つていた。日本という国は貧しい時に教育を見直し、産業を発展させる力を持つていた。



講演する大坪先生

五十年後の日本の人口は、現在よりも三千万人減る。ということは、今までも同じ仕組みではいけないのである。高齢者も若者も社会や教育を見直す必要がある。二一世紀の教育に一番大切なことは、感動を与えたり感激させられたりができる、自立して社会に貢献できる人を作る教育をしなければ

ならないということである。

物のあふれる今の日本では、ダメな先生に指導され、心の教育を怠つた結果、言うことは聞くが新しいものを創り出せない、自分の考えの無い人間に育つてしまふ。古いというものには伝統や文化はあるが、必ずしもいいとは思えない。今からは、新しい文明・文化や社会システムを作り出し、世界に向けて発信したり、人生計画を立て、脳力を高めて、人に情報・技術・感動を与えるために、新しい教育・学習を一生涯続けていったほうがいい。今からは人作り教育をすることによって、人生を変える、そして国を変えることができるだろう。

感想

大坪先生のお話は、今まで毎日をなんとなく過ごしていた私にとって、これからは人のため自分のために、何かしら力を身につけていきたいと思わせて下さいました。大坪先生の、「物作りの時代は終わった。今からは人作りだ。その為に産業大学の学長になつた。」という新しいものへ挑戦する姿がとても頼もしく映りました。とても素晴らしく、とても楽しい講演でした。

第一分科会

「生徒の生活指導について」

問題提起

最近、高校生の服装が乱れていると感じられる。女子のスカート丈が極端に短い、シャツを外に出す、靴のかか

とを踏んで歩くなど。高校生の身だしなみの指導について問題提起した。

#### 各意見

・現状として、女子のスカート丈に関しては、皆がしているから、仲間外れにされたくないと言っ意識から友達に合わせよう。

・大人と子ども意識の違いがあり、何が基準か定まらない。学校の全職員が登校時に、校門や昇降口で『声掛け指導』をして注意を促すことで、効果が少しずつ表れているようだが、校外では芳しくない状態である。

・良くなった例としては、アルバイトをするようになり、社会で通用しないことを実感し気を付けるようになった。部活動に参加して、自分の学校を良く見せたいと言っ気持ち芽生え、スカート丈を自発的に直したということなどが地区会で報告された。

・具体的な対策として考えられることとして、規制を厳しくして、しっかり守らせる。ボーダー・ラインを決め、徹底させる。家庭でも目を配り注意する。短パンは、体育の授業時のみ着用する。身だしなみチェック・カードを作り、先生が指導を受けた生徒に渡し、累積した生徒には厳重注意を与える等が挙げられる。

・継続的な指導が不可欠で、制服と私服の違いを理解して、清潔で好感の持てる正しい着こなしを身に付けて

欲しいものである。

#### 第二分科会

「PTAの実践・研修活動について」問題提起

本校PTA活動の紹介と今後の課題について発表し、他の各学校のPTA活動の内容についても発表していただき、PTA活動への多くの保護者の参加を促すにはどのような方法があるかを問題提起した。

#### 各意見

・子供達の短歌の作品をPTAに配布したところ、Pも参加したいとの声があり、講習を行い募集した。子供とのコミュニケーションを取って参加し、家庭にしながらPTA活動に参加できた。

・文化祭のバザー収益を学校の設備面に使えるよう検討した。

・性に関する臨時総会を講師を招いて開き、「子育てにおける性教育のあり方」を取り上げ、出席率八九%になった。

・親と先生の情報交換の場としての地区会を盛り上げるため、PTA講演会なども催している。

・地区会は先にアンケートで出欠を取り、欠席の人は何故出られないか理由を書いてもらった。結果、出席率がアップした。

・文化祭バザーを一般の保護者の方の参加で盛り上げ、PTAが中心的役割を果たした。収益は生徒の為に使

う予定である。

・「交通事故0の日」の活動としては、校門にPTAが立って無事故を呼び掛けるとともに、あいさつを心掛けている。

・三つの委員会 補導 保健 花畑、二つの実施会 理事 常任委員を設け、土曜講座の巡視、模擬試験の監督を行っている。

・五つの委員会 文化 総務 広報 進路 安全保健の各委員会別に活動をしている。

#### 助言者より

・子供も時代も変わる。その時々合った内容を考えたPTA活動が大切である。何が大切か学校と家庭で考える。



分科会の風景

・先生、保護者、地域が同じ高さ太さの三脚のようになって、子供の事を

守っていく。

・PTAのPとTが向き合うだけでなく、地区の子供達の事を考える上でPがPに話しかけるPTA活動も大切である。

#### 第三分科会

「長期的展望をもった進路意識の育成について」

問題提起 子供さんと実際に行っている話し合いの内容。

#### 意見

・おおまかな話し合いしか出来ていない。(P)

・家業を継ぐ為に大学へ進み、そのまま家業を継ぐ予定。

・親子で農業を行うことが夢で、高卒後に企業で勉強させる予定である。

#### (P)

問題提起 早期離職者が50%程いる現状をどのように受け止めているか。

#### 意見

・最低3年間は勤めて欲しい。(P)

・新入社員を見て気付いたことは、勉強以外の大事な事が身につけていない。(P)

・自分の理想と希望で会社に勤め、理想と現実が違っているとすぐに辞めたがる。(P)

問題提起 学校へ求める指導、地域・企業・保護者の協力体制はどのようになっているか。また、どのような指導をしているか。

意見

- ・自分をダメにしない為、いろいろな講座を学校内で開講(Ｔ)
- ・生徒と教員の信頼関係が出来ている。(Ｔ)
- ・PTAの進路対策委員が一緒になつて活動。(P)
- ・親や先輩から年に十回位進路講演会を開いている。(P)
- ・助言者より
- ・早めの進路決定は、とても大切な事である。好きな仕事をやる事が大切である。
- ・人に喜びを与える、そのような生徒・人間に成長していく事が大切である。
- ・2年生には、職場(企業)を見に行く事を経験させている。
- ・希望する進路を実現しよう!をテーマに話し合っている。

七月三日(土)  
磐田地区 於 ワークピア磐田  
参加者 一八六名

- 研修テーマ
- 「子育て再入門 子育て親の役割」
- 学校の役割
- 次第日程
- 全体会
- ・開会のことば

あいさつ

- 磐田西高等学校PTA会長 春日 芳典
- 磐田地区校長会会長 太田 一夫
- 来賓あいさつ
- 公立高等学校PTA連絡協議会 西原 茂樹
- 名誉会長
- 県PTA指導者研修会報告 堀内 昌文
- 磐田南高等学校PTA会長

講演会  
「親と子の絆・教師と生徒の絆」  
(要旨)

SBS静岡放送ラジオ  
パーソナリティ 山口弘三 先生



講演する山口氏

コミュニケーション能力の育成から社会で生きていく力と表情・感情をもち、メディアの情報を判断できる若者を育てていかないといけない。

そのためには、まず、対面コミュニケーションの育成が大切である。現在の状況は、携帯電話・パソコンなどの発達により、社会的言語を持たない排他的なグループの言語のみが拡大している。その対策として、家庭で親と子の会話を意図的に増やすことが重要である。体を通じての感情や表情を感じ取る力を付ける。

次に必要なものは、学校教育である。そのための提案としては、ティーンズの導入によって、他人の意見を聞き、自分の意見をまとめより正しい情報を見つけ、判断する能力を身につけることが大切である。

これらの力をより高めるためには、学校におけるメディアリテラシー教育の推進が「対面コミュニケーション」の力を獲得することである。

第一分科会

「学校で得てほしいもの」

【問題提起】

磐田西高等学校PTA

子供が高校でどのようなことを学んだり、経験してほしいか。次の七項目から五つを選び順位付けをして下さい。

- ア 専門的な知識を身につけさせたい
- イ 職業的技術を身につけさせたい
- ウ 一般的・基礎的な知識を身につけさせたい
- エ 友人と深い友情を結ばせたい
- オ 自由な時間を楽しませたい

力 部活動を一生懸命やらせたい  
キ その他

個人の記入が終了後、グループ内で各自発表しグループの順位付けをして下さい。その後グループの代表者が分科会で発表し、分科会の意見を決定して下さい。

【討議】

参加者の個別順位付けの結果は、図表「学校で得てほしいもの」とおりです。

個人の順位付けの後、グループで話し合いをし、最後には分科会の意見として第一位はウ一般的・基礎的な知識を身につけさせたい。第二位はエ友人と深い友情を結ばせたい。第三位は力部活動を一生懸命やらせたい。第四位はア専門的な知識を身に付けさせたい。第五位はオ自由な時間を楽しませたい。との結果となりました。

話し合いの中で出た意見は、「社会に役立つ人間になって欲しいから」基礎的な知識が土台となって卒業してから次のステップとなるから、「高校時代の友人は長く付き合えるから」、「部活動で体力的、精神的に強い子供になって欲しい」、「自分を見つめる時間をもって欲しい」など活発な意見が交換されました。

【まとめ】

磐田南高等学校校長 太田一夫  
磐田地区高校生の「学校で得たいもの」のアンケートによると、図表のとおりです。生徒の選んだ第一位は友人

と深い友情を結びたい。第二位は一般的・基本的な知識を身に付けたい。第三位は専門的な知識を身につけたい。第四位は部活動を一生懸命やりたい。第五位は自由な時間を楽しみたい。など保護者と生徒の学校への要望のずれが見られる。より良い学校をどうするか検討する必要がある。

### 第二分科会

「子供に望む生き方は」

#### 【問題提起】

磐田西高校PTA

次の七項目の中から五つを選び順位を下さい。

ア 他人がどう言おうと、自分がこう思ったことを主張する(自己主張型)  
 イ 無理に自分の考えを押し進めないで、多くの人の意見に合わせる(協調型)  
 ウ 他人に負けないように頑張る(競争型)

エ のんびりと自分の人生を楽しむ(非競争型)  
 オ 自分がある程度犠牲にしても、他人の面倒を見る(奉仕型)

カ 自分の生活よりも、まず社会のことを考える(社会優先型)

キ 社会のことを考える前に、まず自分の生活を大切にする(個人優先型)  
 ク 個人の順位付けの後、グループとして分科会の意見を決定する。

#### 【討議】

参加者個人の順位付けの結果は、図

表「子供に望む生き方は」の通りでした。その後グループ・分科会での話し合いの結果は、第一位はイ協調型、第二位はウ競争型、第三位は、ア自己主張型、第四位はオ奉仕型、第五位は個人優先型となりました。選択にあたっての意見としては、「社会の一員として、多くの人の考えを聞き入れる姿勢を持ってほしい」、「他人と競いあつて自分をみがく」、「個人の意見を貫くことも大事だと思う」、「自分も大切にしてほしいし、他人も大切にしてほしい」、「社会のことも考えるのも必要だけれども、まずは自分の生活を確立」など多くの意見がだされました。



分科会の風景

#### 【まとめ】

袋井高等学校校長 大久保 勇

磐田地区の高校生のアンケート「子どもに望む生き方は」では、一位は非

競争型、二位は協調型、三位が競争型、四位は自己主張型、五位は個人優先型と出ており、争わずゆったりと自分のペースで生活していきたい生徒像が見られています。社会との繋がりをどうするかなど考えていく必要がある。

### 第三分科会

「子供にどんな人になって欲しいか」

#### 【問題提起】

磐田西高校PTA

次の七項目から五つを選び順位付けを

ア 経済的に豊かな生活のできる人  
 イ 平凡でも幸福な家庭を築ける人  
 ウ 世の中の役に立てる人  
 エ 能力・才能を生かせる人  
 オ 社会的地位の高い人  
 カ 親の面倒を良く見てくれる人  
 キ 仕事を熱心にする人  
 ク 個人の順位付けの後、グループ、分科会で討議をしてください。

#### 【討議】

参加者個人の順位付けの結果は、図表の「子供にどんな人になって欲しいか」の通りでした。グループ及び分科会の話し合いの中では、一位はイ平凡でも幸福な家庭を築ける人、二位はウ世の中の役にたてる人、三位はエ能力・才能を生かせる人、四位はキ仕事を熱心にする人、五位はア経済的に豊かな生活のできる人となりました。

選択に当たつての意見は「家庭が基本である」、「普通の家庭を築いて欲しい」、「自分のことだけではなく世の中のことを常に考えて行動してほしい」、「仕事に情熱をもつと成果もついてくる」、「親の面倒には期待しないが親切な子になって欲しい」意などが出されました。

#### 【まとめ】

二俣高等学校校長 濱田 勝

磐田地区の高校生が選んだ「将来どんな人になりたいか」の図表を見ると、一位は平凡でも幸福な生活を築ける人、二位は能力・才能を生かせる人、三位は経済的に豊かな生活のできる人、四位は世の中役に立てる人、五位が仕事を熱心にする人となりました。この結果をみると自分中心の生活を夢見ている姿が見られます。この様子から見られることは、親は社会とのつながりに重要さを見せています。従つて、世の中に目を開く視点を与えていくことが大切です。

### 第四分科会

「子供がしてはいけないこと」

#### 【問題提起】

磐田西高校PTA

次の十二項目の中から五つを選び、順位付けをしないさい。

ア マニキュアをぬる  
 イ 学校へマンガを持っていく  
 ウ 学校に教科書やノートを置いていく  
 エ 靴や上履きのかかとをつぶしては

才 他人の傘を黙って使う  
 カ 制服を改造する  
 キ ゲームセンターなどにいく  
 ク 他人の自転車に黙って乗る  
 ケ 部分的にパーマをかける  
 コ バイクで無免許運転をする  
 サ タバコを吸う  
 シ 酒を飲む  
 個人で順位付けの後、グループと全体で話し合いをしてください。

【討議】

参加者の順位付けの結果は「子供がしてはいけないこと」の図表の通りです。分科会での討議の結果も、一位がコバイクで無免許運転をする、二位はク他人の自転車に黙って乗る、三位は才他人の傘を黙って使う、四位はサタバコを吸う、五位はシ酒を飲むでした。

討議で出された意見は「他人に迷惑をかける」「違法行為である」「未成年だから」「体に害」などでした。

【まとめ】

袋井商業高校校長 太田輝夫

「磐田地区の高校生の選択の結果は、表の通りです。一位は親と同様に、バイクで無免許運転をするでした。二位はタバコをすう、三位は他人の自転車に黙って乗る、四位は酒を飲む、五位は他人の傘を黙って使うでした。この結果から見られることは、違法行為にはやはり、親の指導が届いていることわかります。しかし学校の規則に関しては意識が子供にも低いことがわかり

ました。今後、高校生活でどのように教師と生徒そして親が向き合っていくか考えさせられました。

六月二五日(金)  
 浜松地区 於 呉竹荘  
 西遠 参加者 一二五名

一 開会のことは

浜北西高校 P T A 会長 瀧口 紀弘

二 常任理事校あいさつ

浜松北高校 P T A 会長 竹内 精一

三 来賓あいさつ

県高 P 連副会長 鈴木 敏弘

四 講演

演題

「感性の豊かさとは人生…切れやすい子とボケやすい老人と…」

講師 金子 満雄 氏

(浜松早期痴呆研究所所長)

「これからお話しすることは、皆さんにとって気分がいい話ではありません。こんな言葉から氏の講演はスタートした。

「痴呆にかかるのは学校の先生や役人が非常に多い。というのは学歴や地位が高くて感性が乏しい場合が多いからだ。二十歳でもう将来ボケるかボ

ケないかわかる。たとえば、花の美しさに感動できない人はボケる。また、音楽を演奏したり、絵を描いたり、俳句を作る楽しみを知っている人はボケない。

仕事で使っているのは主に左脳である。仕事しか一生懸命やってこなかった人は、仕事を辞めて数年のうちにボケてくる。左脳ばかりを使っけていて、本当に大切な感性の源となる右脳がほったらかしになっているからだ。

よく趣味を持ってはボケないというが、趣味とお稽古事とは異なる。趣味というのは、熱中して徹夜してでもやりたいという興奮をとまなうものだ。退職後に始める書道やお茶などは、単なる暇つぶしになってしまっている場合が多い。趣味とは生き甲斐を感じるものごとである。仲間が増え、心がときめく。生きる元気がわく。目が輝く。これこそが趣味なのだ。

ボケ治療には痴呆患者の子どもたちが鍵になる。感性が豊かな子は親を大切にし、ボケた親をかわいそうに思っけて親と一緒に遊んだり、散歩したり、ボケの治療に積極的に関わってくれる。ところが、たいてい痴呆患者の子どもは感性が乏しく、仕事を言い訳に治療に参加しない。そして、その仕事人間である子どもも、親と同様にはやくボケる。そうすると代々ボケやすい家系になるのである。

現代の日本では、母親しか子どもの感性の育成に関わっていない。母親が

感性豊かなら、子どもも感性が豊かになるが、母親がだめなら、子どもだめである。父親はまったく子育てに関わっていないし、学校教育も小学校以降は知識偏重で感性教育には全く期待できない。

現代の学校は学力中心であり、こうした状況は、感性の乏しい人間をつくりがちになる。



開会あいさつ

今、勉強は一応普通にできるし、おとなしい子に見えるのに、急に切れたり、残酷な行為に走る子どもたちがあちこちで大変な事件を起こし、注目を集めている。これは左脳の働きである言語、計算、論理(つまり勉強)は普通に教育されていても、右脳の感性がまともな育てられていないところに原因がある。右脳は音楽や絵画、詩歌といった芸術やゲーム、スポーツによつ

て鍛えられるが、その基本は愛情、思いやり、感動にある。知的教育に偏りすぎた日本の学校教育の中で、感性教育が顧みられることはほとんどなかったと言っている。感性教育こそを第一に重視するヨーロッパの国々に大きな水をあけられている。

現在では母親だけが最後の砦となるが、その母親の感性の良し悪しにより、子どもが将来ボケやすいかボケにくいかが分かれてくる。その子をしっかりと抱きしめて子守歌を歌ってやり、お伽噺をしてやり、絵本を読んでやり、お伽噺したかどうか、がその分岐点となるのである。

感性の原点は三歳から七歳にあり、それまでに母親がその子と一緒に花を育て、その花が咲いたときに親子で手を取り合って感動する機会があれば、それが感性の芽生えにつながる。その喜びを知った子は、もはやどこに行っても花をむしることはないし、犬や猫を虐めたりしないし、人を刺したりもしないことが分かっているのだ。

日本では父親が子どもの感性教育にほとんど役立っていないのが現状である。もっと子どもとつくみあいの遊びをしてやり、一緒に歌を歌ってやるべきだったのだ。団らんのない冷たい家庭に育った子どもにはみんな問題がある。愛情飢餓状態にあるともいえるのである。

そうした感性が乏しい子どもが大人になるとその欠陥はさらに明確にな

る。たとえば、話が理屈っぽくユーモアがない。無趣味でゲームや音楽を馬鹿にする。外聞や対面ばかりを気にして、友人も少ない・・・こうした真面目一途の仕事人間は、仕事ができても社会的地位は高くなっても、思いやりがなく、他人とのチームワークを上手にとることもできない。家族に優しい言葉をかけてあげることができない。こうした人間の退職後は、もはや述べたまでもないであろう。



講演する金子氏

私たちのグループが開発した感性度調査の結果を紹介すると、結果が良好な順に、アマチュアオーケストラ、プロオーケストラ、保育士・・・感性が豊かでない勤まらない仕事をしている人たちである。逆に下位は会社員、エンジニア、教員など。

現在の教員の中に感性豊かな人は本

当に少ない。子どもたちは見事に感性豊かな先生をかき分ける。いつでも子どもたちがよってくる先生、卒業しても何度子どもが遊びに来る先生・・・よい教師とは感性豊かな先生のことだ。そして子どもたちはそうした先生が大好きなのである。

感性豊かな教員による感性豊かな教育。勉強など二の次でいい。人間としての感情をしっかりと持った愛情あふれる生徒を育てて欲しい。」

終始ユーモアたっぷりの話しぶりで、会場には笑い声があふれた。しかし、そのユーモアの背後には、豊富な臨床例を元にした厳しい現実が横たわっており、鋭い指摘に胸をえぐられた聴衆も少なくなかった。真面目一本、仕事一本に生きている人を「犬みたいな牛みたいな馬鹿な人」と小気味よく言い切り、感性の重要性をひたすらに訴えた氏の講演は、今後の学校教育への提言ともあいまって、学ぶことの多い研修会であった。

### 平成十七年度行事予定表

一 県総会・研究会

期日 平成十七年六月一日(水)  
会場 しずぎんホール(ユーフォニア)

二 東海地区総会・研究協議会

期日 平成十七年六月十六日(木)  
会場 静岡市民文化会館

三 全国大会・研究協議会

期日 平成十七年八月二十六日(金)  
二十八日(日)

会場 長野市 ビックハット  
(オリンピック記念アリーナ)



# 平成十六年度高校生善行表彰

平成十六年十月十二日(火)に善行表彰選考委員会が開かれ、  
本年度の善行表彰は次のとおり決定した。

団体の部(一校一団体)

学校名	団体名等	代表者名	表彰内容
榛原高校	ボランティア同好会	中島 操希	ボランティア活動

個人の部(六校二十九人)

学校名	氏名	表彰内容
大仁高校	高橋 亜弥	人命救助活動
大仁高校	森田 真理	人命救助活動
大仁高校	堀井 亜希子	人命救助活動
大仁高校	山田 千春	人命救助活動
長泉高校	米山 千春	ボランティア活動
静岡西高校	小川 侑子	人命救助活動
静岡西高校	山田 智未	人命救助活動
静岡西高校	八木 健太郎	人命救助活動
静岡西高校	藪本 龍弘	人命救助活動
静岡西高校	松崎 恵実	人命救助活動
島田工業高校	鈴木 太二	人命救助活動
島田工業高校	鈴木 康平	消火活動

島田工業高校	杉本 裕樹	消火活動
島田工業高校	大坪 和樹	消火活動
島田工業高校	河口 升	消火活動
島田工業高校	成岡 拓	消火活動
島田工業高校	前田 心	消火活動
島田工業高校	松永 勇人	消火活動
吉田高校	小野田 純子	ボランティア活動
吉田高校	米村 奈津季	ボランティア活動
引佐高校	田力 一樹	人命救助活動
引佐高校	杉山 大	人命救助活動
引佐高校	大石 和矢	人命救助活動
引佐高校	松下 俊介	人命救助活動
引佐高校	竹山 尚希	人命救助活動
引佐高校	寒河井 賢斗	人命救助活動
引佐高校	村井 良隆	人命救助活動
引佐高校	政本 将宇士	人命救助活動
引佐高校	藤田 真弥	人命救助活動

静岡県公立高等学校PTA連絡協議会  
〒四二〇 八六〇一  
静岡市追手町九番六号 県庁西館 八階  
電話(〇五四)二五五・四六七八  
印刷 三協印刷株式会社  
電話(〇五四)二八三・二二一